

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：12401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720351

研究課題名(和文) 鉄器の出現と普及における流通網及び社会変化に関する日韓比較研究

研究課題名(英文) Comparative study of appearance and diffusion of iron implements between Japan and Korea

研究代表者

中村 大介 (NAKAMURA, Daisuke)

埼玉大学・教養学部・准教授

研究者番号：40403480

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、朝鮮半島を中心として東北アジアの石器の消滅と鉄器の普及の検討を行った。その結果、朝鮮半島南部では、紀元前3世紀頃から鉄器が入ったのち、紀元前2世紀後半には利器としての石器が消滅することが判明した。これはヨーロッパも含めた様々な地域の金属器化と比較しても早い変化である。この変化の背景には、広い流通網と活発な交易があり、朝鮮半島南部の社会基盤が交易と密接に関わっていたことが明らかとなった。そして、漢の領域拡大の際、この状況が視野に入り、楽浪郡の設置に繋がっていったと推定された。朝鮮半島南部の鉄器化は単なる利器の変化ではなく、東北アジアの歴史的変動に関わるものであると結論づけられた。

研究成果の概要(英文)：This research revealed the transition of tools from stone to iron in Northeast Asia including Korean peninsula. As a result, stone implements as a sharp-edged tool have disappeared until the latter half of 2nd century in the southern part of Korean peninsula after starting of iron import in 3rd century. This change is quite faster than other areas including Europe. There are wide network and active trade in the background of the fast transition from stone to iron. Beside, it shows that trade are deeply related with the social foundation in the southern part of Korean peninsula.

This result suggests the possibility that the active trade-network became an object for the conquest of Han dynasty. That came down to the establishment of Lelang commandary. It can be concluded that the transition from stone to iron in Korean peninsula is not mere change of sharp-edged tools, but is the change which concern with the historical movements in Northeast Asia.

研究分野：東アジア考古学

キーワード：朝鮮半島 東北アジア 石器 鉄器 流通網

1. 研究開始当初の背景

『三国志』魏書の烏丸鮮卑東夷伝に記録されているように、朝鮮半島では早くから鉄が産出することが知られている。原三国時代（紀元前2世紀後葉～紀元後3世紀）には、日本列島と比べて、豊富かつ多様な鉄器が保有されていた。また、遼東地域から南下してきた粘土帯土器文化の後半段階（紀元前3世紀）に鉄器が舶載され始め、原三国時代のある段階に鉄生産が開始されたことも分かっている（李南珪 2002、孫明助 2005、村上 2007）。しかし、鉄に対する研究は、「鉄器の出現と展開」、「鉄生産の開始」など、鉄そのものに関心が集中し、日本やヨーロッパで議論されている「石器から金属器への転換」という視点ではなされていない。

現在、日本考古学では鉄生産などの冶金技術の研究だけでなく、鉄器普及による社会変化に関する研究も多く、弥生時代後期に鉄器が普及することで、石器だけではなく、既存の器物流通網全体が変化することが指摘されている（下条 1998、松木 1996、禰宜田 1998、他）。そのため、鉄器の普及は、この時期の社会再編の一つの要因として重要視されている。

そして、製錬ができなくても鍛冶による再加工が可能になった時点で、日本列島では石器から鉄器への転換が開始する。そのため、朝鮮半島でも同じ状況にある粘土帯土器文化の後半期に石器から鉄器への利器の転換があった可能性が高い。しかし、前述したように、その研究自体がないので、日本列島の変化と比較することができない状況にある。そこで、青銅器時代の石器の生産と流通を復元し、鉄器の出現と普及とその流通網のように変化したかを検討することが、新たな視点による朝鮮半島の歴史的画期、日本列島の社会変化との共通性と差異の解明につながると考え、本研究を開始した。

2. 研究の目的

上記の研究動向を受け、本研究では朝鮮半島における石器から鉄器への変遷を解明することを目的とした。そして、以下のような項目で検討を進めた。

- 鉄器の拡散と定着過程
- 石器生産と流通
- 玉類と青銅器の流通
- 鉄器化に際する日韓の社会変化比較

3. 研究の方法

鉄器については、共伴する遺物に注意しながら、中国東北地方から朝鮮半島への広がる時期を検討する。主として、鉄斧（鏹）の型式差と製作技法に注目し、その変遷を考えた。

石器については、欧米や日本では金属器導入に際して、以下のような共通した変化が指摘されている（Ford et al. 1984、下条 1998、Butler 2009、Karimali 2010、器種の減少、

精製品の減少、伐採・加工斧からの交代進行である。本研究ではこれらに留意して石器から鉄器への変化を考えた。

また、流通網の検討については、石器の流通とある程度関連し、理化学的な検討が可能な碧玉製管玉を対象とした。研究協力者の藁科哲男（遺物材料研究所）が進めてきた蛍光X線分析による微量元素比から産地を同定する方法を使い、朝鮮半島の碧玉製管玉の流通の復元を試みた。韓国の資料については、海外研究協力者の金奎虎（公州大学校）とともに分析を実施した。

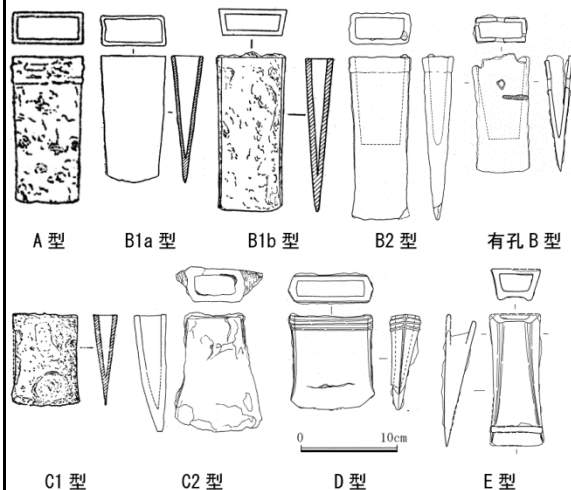
4. 研究成果

(1) 鉄器の拡散と定着

中国東北地方から朝鮮半島に広がる鉄斧は鑄造品であり、農具の鏹が含まれている（図1）。燕の鉄器を基礎とするが、遼東地域、朝鮮半島に生産工房ができる過程である程度変容する。また、先に滅亡した諸国の工人が再編され、この地域の鉄器の変化に関与した可能性もある（論文）。

鉄斧は戦国時代後期のB1型が後まで継続するが、これから変化したB2型が秦・前漢前期に成立する。C2型は前漢中期以降に朝鮮半島にも出現する。

遼東地域では、戦国時代後期に燕本国にはない有孔B型鉄斧や鉄戈があることから、戦国時代後期から少しずつ燕国鉄器の規範からはずれた鉄器が生まれ始め、秦・漢代には新しい鉄器の影響を受けつつ、より燕の規範からはなれた鉄器が製作された。前漢前期には、私営鉄器工房を容認した時期があり（東 1982、白 2005）、それがさらに型式的な変容を招いたのだろう。遼東地域でも辺縁に近い岫岩城南の鉄器は、燕系統であるが、漢代になってからの器種が混じっており、まさにそのような時期の産物である。また、この時期には近接した遺跡でも型式の異なる鉄器があることから、本来、燕の工房が複数あり、それらの一部が私営化することで、鉄器に、



A型：易県燕下都武陽台22号工房 B1a型：敦漢旗老虎山 B1b型：易県燕下都解村東北3号墓 B2型：扶餘合松里 有孔B型：長水南陽里1号墓 C1型：易県燕下都辛庄頭30号墓 C2：大同中里 D型：福岡御床松原 E型：永川龍田里

図1 鉄斧（鏹）の分類

より多様性が生じた。この状況が朝鮮半島の鉄器の組成にも影響するのである。

一方、戦国時代後期～前漢前期は、朝鮮半島南部の粘土帯土器文化後半期で初期鉄器時代に該当する。鉄斧がみられるのは、墓に限られ、集落では出土しない。また、破損した石器を修理・改変するための鍛冶遺構も粘土帯土器文化末期～原三国時代初期まで確認されていない。しかし、鉋を鉄鋸に改変した事例が安城萬井里にあることから、ある程度の再加工が行われたことは確かである。そして、集落では、鉄器は直接出土しないものの、利器である石器に変化がおこる。

(2) 石器の変化

遼東地域 戦国時代後期と限定できる資料は少ないが、燕の鉄器が出現した後も伐採斧と加工斧が残存する。現在の西豊県や開原市のある産地部では、特に伐採斧が多いようである。また、全体的に石包丁が残存しているのも特徴の一ついえよう。石斧の精製度については報告からは判断が難しい。

一方、撫順蓮花堡では、伐採斧と考えられるA型鉄斧、加工具である鉄鑿、収穫具である鉄製摘鎌が出土しているが、それらと機能的に対応する石器が出土している。鉄器80点と比較して、石器は9点であることも考慮すると、まさに石器から鉄器へ移り変わる様相を示す遺跡といえよう。そして、前漢前期の鑄造鉄器が多量に出土した岫岩城南では石器はみられないので、約100年で石器から鉄器の交代が完了するといえる。精製度の低い石斧類もみられないことから、変化が極めて急速であったことが窺える。戦国時代後期には遼東地域で燕の拠点形成されていることと関係するだろう。なお、撫順蓮花堡では、ガラス小玉も出土しており、朝鮮半島南部の粘土帯土器文化後半期の副葬品の全てが網羅されている点にも注意したい。

朝鮮半島南部 粘土帯土器文化は青銅器時代と初期鉄器時代にまたがり、前述したように、後者において墓に燕系の鑄造鉄斧が副葬される。粘土帯土器文化の石器は在地の松菊里文化群のものを継承しており、起源地である遼東地域のものとは異なる。

鉄器出現前後の時期を含む粘土帯土器文化の大集落である安城盤諸里では、未成品や用途不明の資料を含めても石器総数は39点であった。その内、伐採斧は1点、加工斧は4点である。この集落の半分の規模である青銅器時代後期の保寧寛倉里F地区では石器総数は192点であり、伐採斧7点、加工具36点が含まれる。初期鉄器時代には全体的に石器が減少する傾向にあり、斧の比率も下がっている。ただし、加工斧が伐採斧よりも多くという傾向は青銅器時代後期から継承している。

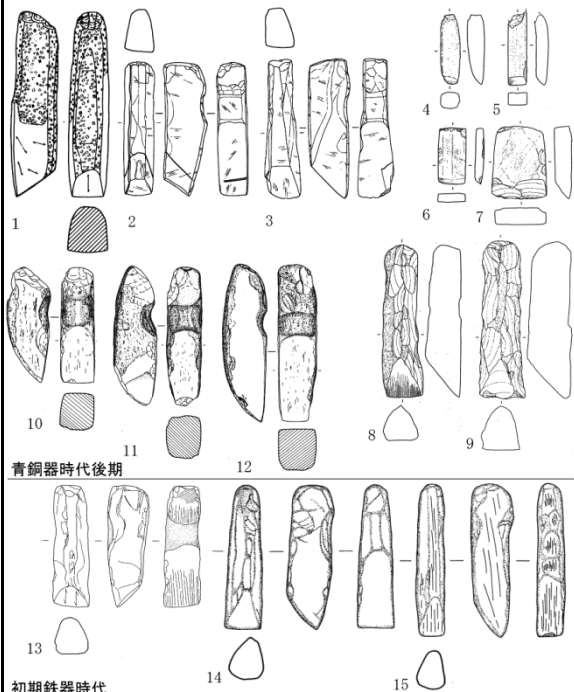
粘土帯土器文化でも青銅器時代後期段階では、石器生産を行っている遺跡もある。大邱燕岩山では、伐採斧3点、加工斧68点の

未製品が出土しており、5点を除く全てがホルンフェルス製であった(図2-4~9)。この遺跡を含む嶺南地方では、青銅器時代後期からホルンフェルスが豊富で、大型の石剣や加工斧を製作し、朝鮮半島南部各地に搬出していたことが指摘されている(黄2011)。この地域の粘土帯土器文化は石材、石器型式ともにこれを継承している。金海大清では数量は多くないが、堅固な伐採斧と加工斧が出土しており、在地の青銅器時代文化に属する資料と比しても遜色がない(図2-10~12)。

しかし、初期鉄器時代になると、加工斧のなかでも柱状片刃石斧に変化がみられる。嶺南地方の陝川盈倉里、京畿地方の安城盤諸里ともに、溝のある面の頂部を平にせず、未製品の形態に近いまま使用する資料が確認される(図2-13~15)。柱状片刃石斧は、青銅器時代後期では、保寧寛倉里B区域100号住居出土資料のように、自然面を残すものも含まれるが、全面研磨され、面取りがなされる。安城盤諸里のものは全てが面取されており、石器製作に対するゆらぎが生じている。

小結 以上の様相から、粘土帯土器文化の石器は鉄器出現期にも、加工斧と伐採斧ともに残存することがわかった。ただし、遼東地域については、燕の拠点できる前の段階が判然としないので、どのように石器が減少していったかは不明瞭である。

朝鮮半島南部においては、石器の数量自体の激減に加え、精製度の低い加工斧が出現するという変化がみられる。なお、朝鮮半島西南部では、青銅器時代後期段階の粘土帯土器文化の墓に青銅製の斧と鑿も副葬されているが、同時期の保寧校成里の集落出土の石斧類を参照すると、丁寧な作りであり、青銅



【松菊里系文化】1: 保寧寛倉里100号住居 2: 密陽貴明里330号住居, 3: 同331号住居 【粘土帯土器文化】4-9: 大邱燕岩山, 10-12: 金海大清3号住居, 13: 安城盤諸里, 14号住居 14-15: 同19号住居

図2 朝鮮半島南部の加工斧

製の工具類が石器に影響を与えている様相はみられない。

一方、鍛冶炉は初期鉄器時代末～原三国時代初頭（紀元前2世紀前半）に出現し、確実に鑄造及び鍛造鉄器の再加工が可能となる（論文）。この段階は、三角形粘土帯土器の段階であり、泗川芳芝里から、伐採・加工斧が15点程出土したという研究もあるが（高2012）、時期が確定できる確かな資料はなく、砥石を除いて石器はほぼ消滅している。やはり、100年程度の急激な消滅であることは判明したといえる。

(3)流通の変化

青銅器時代後期から初期鉄器時代の流通についての研究は多くないが、石器については、前述したように、朝鮮半島東南部の嶺南地方から南部全体にホルンフェルス製の石剣や加工斧が搬出されという研究がある（黄2011）。こうした流通を理化学的に明確化するため、最も広域に流通する器物の一つである碧玉製管玉を対象として分析を行った（論文、発表）。

朝鮮半島南部の碧玉原産地は不明であるが、蛍光X線分析を行ったところ、大きく分けて二つのまとまりが確認された。それが「未定C群」と「寛倉里A群」である。

未定C群は弥生時代初頭に日本列島にも流通する碧玉であるが、朝鮮半島ではそれより古い段階から存在し、青銅器時代後期には90%以上が該当する。そして、その流通範囲は朝鮮半島南部全域に及ぶ。大型品が嶺南地方南部に多いため、ここに流通の中心があったと推定される。

一方、寛倉里A群は朝鮮半島中西部の湖西地方を中心として、青銅器時代後期の松菊里文化の範囲に流通する。そして、これらは初期鉄器時代になっても粘土帯土器文化の墓から出土する。

つまり、碧玉製管玉については、嶺南地方から朝鮮半島南部全体に広がる交易網と、湖西地方を中心とした西部に広がる交易網の二つがあったといえる。前者はホルンフェルス製石器の流通と一致している。後者は青銅器時代から初期鉄器時代を通じて青銅器の流通と関係が深い。

鉛同位体分析によると、青銅器時代から初期鉄器時代の青銅器は中国産と韓国産の鉛が利用されている（金奎虎・他2012）。この時期の青銅器は朝鮮半島西部に集中することから、西海岸伝いに中国まで到達する交易網が形成されていたことがわかる。寛倉里A群碧玉の流通網自体は現時点で大きくないが、これを含みこむ大きな流通網が朝鮮半島西部に存在したといえよう。鉄とガラスの流通も基本的にこれに依っている。そして、西部流通網と、東南部からの未定C群碧玉とホルンフェルスの広域流通網がリンクし、青銅器、鉄器、ガラスが東南部にももたらされた（図3）。東西各地のより詳細な交易網につ

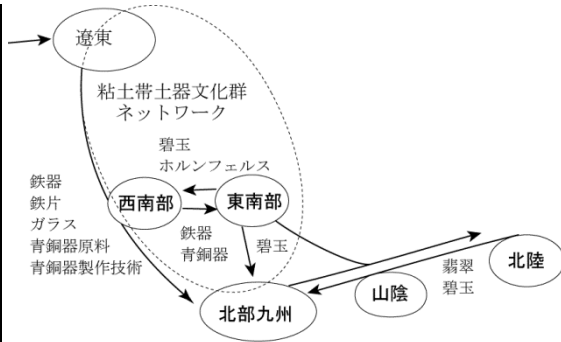


図3 楽浪郡成立以前の流通網

いては、今後の課題である。

ホルンフェルスは石剣以外には大型の加工斧に利用されているが、これが半製品の形で嶺南地方から湖西地方まで流通していたようである。このことは、湖西地方では、木材加工のための道具の一部が外部依存であったことを示している。鉄器についても同様であり、燕の領域からきたものに頼っていた。つまり、湖西地方では、斧のような生活必需品も交易によって入手するような社会であったのである。このような社会背景が速い利器交代に作用したと推定される。

(4)日韓の利器転換の共通点と差異

日本列島では西日本の東西で石器の消滅過程が異なることが知られており、北部九州ではほぼ弥生時代中期後葉に、近畿地方では後期前半に石斧類がなくなる（下條1998）。

石斧の種類においても変化の様相が異なっており、北部九州では広い範囲で、最初に加工斧が消え、次に伐採斧が消える（下條1998、土屋2004）。元々、石製の伐採斧より加工斧は少なかったが、この時期はすでに鑄造鉄斧の破片や鍛造品が多くもたらされており、現時点で北部九州にしかない鑄造鉄斧のようなものまで入手されている。破損品の再利用も可能であることから、小さな刃部でよい加工斧の鉄器化は進行しやすかったといえよう（下條1998）。

近畿地方でも加工斧が伐採斧に対して少なく、弥生時代後期までこの傾向が続く。ただし、近畿地方の西部に位置する播磨地域だけは例外であり、弥生時代中期後葉において加工斧が伐採斧よりも多い。さらに、こうした遺跡においては、有鼻遺跡や奈カリ与遺跡のように、加工斧と機能を同じくする鉄器が多くもたらされている。これらの遺跡の石製加工斧の多くは片岩製であり、打製石器の素材であるサヌカイトとともに四国東部よりもたらされたものである。

鉄器も搬入品であることから、この地域でも石斧類を他地域に頼っていた様相が窺える。近畿地方の大坂湾周辺でも後期初頭の古曽部・芝谷遺跡のように、少量でも石製加工斧が入るようなところでは鉄器が豊富であり、加工斧が必要とされる場所において、鉄器と石器の流通が競合するような状況があったといえよう。最終的には後期前半に淡路

島の五斗長垣内遺跡のように、鉄器を再加工しうる鍛冶技術が定着したことで、石製加工斧はその役割を終えたといえる。想像を逞しくすると、石製加工斧と鑿状鉄器の両方が出土する場所は、鉄器の有用性を理解するのに適した場所といえ、消費者の立場から利器の変化に関与し、地域社会の流通変化を牽引しうる可能性をもっていたともいえる。

一方、朝鮮半島南部は、弥生時代中期中葉に併行する初期鉄器時代末～原三国時代初期に利器としての石器が消滅することから、北部九州より早い段階で鉄器化が進行している。青銅器時代から初期鉄器時代と通じて、伐採斧より加工斧が多い。特に鉄器が早い段階にもたらされる湖西地方は、近畿地方の播磨地域に類似した様相をもち、石製加工斧、鉄製加工具（鉄斧、鉄鑿）ともに他地域からもたらされたものである。つまり、ここでも鉄器の有用性を理解する機会があったということであり、ホルンフェルス製の未製品の搬出が行われていた東部の流通網との関係を見直す状況が生じていたといえよう。ホルンフェルス製の石剣もまた粘土帯土器文化の人々は受容しておらず、その石材としての重要性は下がっていたことも考慮される。

湖西地方を含む西部の鉄と青銅は、初期は燕、その後は遼東地域の首長層を通じて安定的にもたらされていたが、楽浪郡が成立する前に途切れる。衛氏朝鮮が強勢となる時期に関連する可能性があるが、この点は資料不足で判然としない。むしろ重要なことは、交易に頼っていたため、交易が滞ると、社会が急激に衰退した点である。楽浪郡が成立した頃には東南部で鉄鉱石が産出し始めたため、鉄器交易の中心が東部に移った。交易を重要していた西部では大きな打撃であり、衰退が長引く原因となったようである。

以上の内容を整理すると、石材の有用性と流通の安定が保たれている場合は、石器の残存が長引き、社会内部に流通網をもつ場合も、交代に時間がかかる。日本列島は、北部九州では玄武岩製伐採斧の流通網、近畿地方ではサヌカイトの流通網を社会内部で保有していたのである。日本列島と異なり、朝鮮半島南部ではホルンフェルスの価値が落ちており、安定した鉄器流通を背景に早い利器交代がおこったといえる。

(5)まとめ

朝鮮半島南部の交易は、これまで述べてきたように、西部と東部の大きな二つの流通網に支えられていた。鉄器が早くに入る湖西地域は、加工斧を東部の流通網に頼っている部分があり、交易が社会基盤の深くまで関わっていた。これに対し、北部九州は、石斧類の流通網をその内部に保有しており、交易はリーダーの威信に関わるものに限定されていた。そのため、利器の鉄器化は、交易をより社会基盤の深くにまで関わらせる結果となった。日本列島の場合は楽浪郡成立以降の動

向である。朝鮮半島の西側の場合は、それ以前から進行しており、楽浪郡以南の社会における最も早いモデルケースであったといえる。

従って、朝鮮半島や日本列島における鉄器化は、日常生活品に至るまでの道具の外部依存であり、交易の安定は必須条件であった。そのため、弥生時代の中期後葉から終末期とそれに併行する段階においては、その安定を求め、外交関係も含めて日韓各地の政体の盛衰がめまぐるしく起こる。つまり、鉄器化こそが、その端緒なのである。

一方、広い流通網と活発な交易を背景として、紀元前3世紀頃から鉄器が入ったのち、朝鮮半島南部では、紀元前2世紀後半には利器としての石器が早々に消滅するが、これはヨーロッパも含めた様々な地域の金属器化と比較してもかなり早い変化である。ただし、良い面ばかりがもたらされたわけではない。最終的には、漢の領域拡大に際して、この朝鮮半島西部の状況が視野に入り、楽浪郡の設置という結果を招いている。この結果は、逆説的ではあるが、東アジア史的にもこの地域の交易の隆盛には、それだけ大きな意味があったことを示唆しているのである。

引用文献

- 下條行行 1998 『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』平成7～9年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書
- 土屋みづほ 2004 「弥生時代における石器生産と流通の変遷過程」『考古学研究』第50巻第4号
- 禰宜田佳男 1998 「石器から鉄器へ」『古代国家はこうして生まれた』角川書店
- 松木武彦 1996 「日本列島の国家形成」『国家の形成』三一書房
- 村上恭通 2007 『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店
- 金奎虎・他 2012 「銅合金遺物の材質及び特性分析」『広州驛洞遺跡』ハノル文化遺産研究院
- 黄昌漢 2011 「青銅器時代におけるホルンフェルス製磨製石剣の産地推定」『考古広場』9
- 高ウンピョル 2012 「慶南西部地域における粘土帯土器文化の生計経済研究」『韓国考古学報』82
- 孫明助 1998 「韓半島中・南部地方の鉄器生産遺跡の現状」『嶺南考古学』22号
- 李南珪 1982 「南韓初期鉄器文化の一考察」『韓国考古学報』13
- Karimali E. 2009 *Lithic and metal tools in the Bronze Age Aegean: A parallel relationship, Lithic technology in metal using society*, Aarhus University Press.
- Butler C. 2009 *The demise of flint tool industry, Bronze Age Connections*, Oxbowbooks.
- Ford S. et al 1984 *Flint-working in the metal age, Oxford journal of archaeology*, Volume 3, Issue 2.

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計7件)

中村大介、楽浪郡以南における鉄とガラスの流通と技術移転、物質文化、査読有、95号、2015、4-19

中村大介・魚津知克・後藤明、特集にあたって：日本列島をとりまく海、物質文化、査読有、95号、2015、1-3

中村大介・藁科哲男・田村朋美・小泉裕司、玉類の流通と芝ヶ原古墳、埼玉大学紀要教養学部、査読無、第50巻第1号、2014、121-134

中村大介、支石墓にみる日韓交流、支石墓の謎：墓地にみる日韓交流、査読無、2014、3-9

中村大介・田村朋美・藁科哲男、芝ヶ原古墳出土玉類の理化学的分析と考察、城陽市埋蔵文化財報告書第68集、査読無、2014、50-63

中村大介、朝鮮半島の玉文化研究の展望、玉文化、査読無、第10号、137-148

中村大介、燕鉄器の東方展開、埼玉大学紀要 教養学部、査読無、第48巻第1号、2012、169-190

〔学会発表〕(計13件)

中村大介、楽浪郡存続期の交易と競合、公共する古代、2015.2.27、明治大学(東京都・千代田区)

中村大介、日韓の石製玉類の流通とその変化、国際シンポジウム：玉の流通にあらわれた東アジアの交渉、2015.1.28、羅州文化財(韓国)

中村大介、日本の墳丘墓の起源と発展、国際シンポジウム：馬韓墳丘墓の起源と発展、2015.1.9、馬韓文化研究院(韓国)

中村大介、モンゴルの青銅器に就いて、東北アジア考古学研究会7月例会、2014.7.28、東京大学(東京都・文京区)

藁科哲男・田村朋美・中村大介・小泉裕司、XRF、ESR法による芝ヶ原古墳出土玉類の産地分析、日本文化財科学会第31回大会、2014.7.5、奈良教育大学(奈良県・奈良市)

NAKAMURA D., Bead Traders and Political Power during the Formation of Early States, Society for East Asian Archaeology (Sixth Worldwide conference), 2014.06.08, ウランバートル大学(モンゴル)

NAKAMURA D., Technological transfer of iron and glass around Yellow sea in prehistory, Indo-Pacific Prehistory Association 20th Conference, 2014.1.14, シェムリアップ(カンボジア)

中村大介、朝鮮半島の玉類と対外交流、第7回アジア考古学四学会合同講演会(招待講演)、2014.01.11、明治大学(東京都・千代田区)

藁科哲男・中村大介・金奎虎、韓日遺跡出土石製玉類の産地分析から考察する先史交流について、2013 東アジア文化遺産保存

国際シンポジウム、2013.9.5、慶州(韓国)
中村大介、朝鮮半島南部における農耕展開の現状、シンポジウム レプリカ法開発は何を明らかにしたのか、2013.3.17、明治大学(東京都・千代田区)

中村大介、周溝墓の形成、秦漢土墩墓国際学術検討会、2012.11.6、安吉博物館(中国)

中村大介、弥生文化形成と東北アジアの動態、土曜考古学研究会8月例会、2012.8.25、さいたま文学館(埼玉県・桶川市)

金奎虎・金庚澤・藁科哲男・中村大介、韓半島中西部における玉類の産地推定、日本文化財科学会第29回大会、2012.6.23、京都大学(京都府・京都市)

NAKAURA D., Trade innovation between coastal region and inland in Northeast China, Society for East Asian Archaeology (fifth Worldwide conference), 2012.6.7, 西南学院大学(福岡県・福岡市)

〔図書〕(計3件)

中村大介、北方青銅器の鋳型と技術系統、ユーラシアの考古学、高濱秀先生退職記念論文編集委員会編、六一書房、2014、301(97-115)

中村大介、韓半島における玉文化研究の展望、韓国先史・古代の玉文化の研究、福泉洞博物館編、福泉洞博物館、2013、311(59-75)

中村大介、日本周溝墓の形成、秦漢土墩墓考古発現と研究、中国社会科学院考古研究所・浙江省文物考古研究所編、文物出版社、2013、210(164-177)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村大介 (NAKAMURA, Daisuke)

埼玉大学・教養学部・准教授

研究者番号：40403480

(2) 研究協力者

藁科哲男 (WARASHINA, Tetsuo)

遺物材料研究所・所長

研究者番号：無し

金奎虎 (KIM, Gyuhoo)

国立公州大学校(韓国)・自然科学大学(学部)・教授

研究者番号：無し

孫俊鎬 (SON, Junho)

高麗大学校考古環境研究所(韓国)・研究員

研究者番号：無し